

青木 裕次

「言いたい」と「言わなければならぬ」と

生

徒と教師の関係が、フレンドリーを通り越して対等だと思っている人達がいる。確かに人間としては対等である。しかし、教わる者と教える者の関係は対等ではない。教える側は、教えるべき何物かを持つている人間であり、教わる側は、それを知らない者である。

そこには歴然とした師弟関係が存在する。教師という肩書きが教えるのではない。教師は、教えるべき科目や教科の知識があるのは当然のこと、更に己の人格を持って、生徒の人間性の育成にも心掛けなければならぬ。これらのどちらが欠けても教師としては不十分と言わざるを得ない。そして、この二つがあるからこそ、教師と生徒は、その立ち位置で対等とはならないのである。これは、仏教で言う「差別」に通じる。仏法では、万物の本性は全てにおいて平等であるが、個々のものは全てにおいて具体的な差異を持っていると説く。立場が違えば、人間もそれぞれに差別があつて当たり前なのである。

私

が敬愛して止まなかつた青少年赤十字に携わつた先生から、「悪平等」という言葉を、こんな例え話を交えて聞いたことがある。

ここに一箇のリングがある。そして二人の人がいる。この二人にリングを半分ずつ分配することが、理に適つた平等なことで誰でも考えるだろう。しかし、一方の人は先程腹いっぱい食事をしたばかり。片やもう一人は昨日から何も食べていない。このような二人に、リングを半分ずつあげて、それでこと足りるだろうか。こんなとおり一遍の平等を「悪平等」と言う。そう教えられた。

生徒と教師は、人間としての本来は平等である。しかし、教わる側と教える側は、全くの対等ではない。それを対等だと言うのなら、正しく「悪平等」を主張していることになるだろう。

以前に勤務していた幾つかの学校で、暴言を吐く生徒達がいた。教

師を教師とも思わぬ様子で、平然と暴言を吐くのである。平手打ちやげんこつ足蹴りなどの暴力は、教師は勿論のこと、生徒にも許されない。それと同様に暴言もけつして許されない。暴言は、正に言葉を持つてする暴力であり、時として腕力以上に相手を深く傷つける。まだ子どもだからと、暴言を看過してはならない。子どもの時にこそ、暴言への戒めをしっかりと伝えなければならない。

生徒には教師に対して大なり小なり抵抗感がある。これは教師の資質向上にとつて必要なことでもあるが、生徒の抵抗感と暴言は、全く異なるものである。暴言を吐く生徒達に共通するのは、思ったことをはっきりと言うことは立派で素晴らしいことだと、小さい時から教わってきたと主張すること。だから、先生でも親にでも、言いたいことは言う胸を張つて憚らない。

人

は言いたいことを沢山胸に抱えて生きている。これを言ったら、胸がすっきりするだろうと思う時もある。しかし、「言いたいこと」と「言わなければならぬこと」は違う。言いたいことでも、

言つてはいけぬことがある。教師はそのことをしっかりと生徒に教えないければならない。逆に、言いたくないと思うことでも、言わなければならぬことがある。教師は生徒とのコミュニケーションをしっかりと構築することが大切。しかし、それは生徒の顔色を窺うことでも、機嫌を取ることがでもない。嫌われようとも教えないければならぬことを伝えなければならない。その時点で生徒に反発されたとしても、数日後になるか十年後になるか、もつと先のことかも知れないが、真剣に伝えた言葉は、何れ必ず理解して貰えると信じていることである。

(元青森県立北斗高校校長)